

俳句における補文構造とその省略の種々相

新 田 義 彦

要旨

俳句の文芸的美質の淵源は、語句の「省略」にある。この省略ゆえに俳句の解釈が難しく感じられることもある。

本論文では現代文法論における「補文構造 (complement structure)」の概念を拡大適用して、「俳句における省略の機序」を解明する試みについて報告する。ここで「補文」とは、「文」の中心的構成要素である「主辞 (head)」と同位である必須構成要素であると定義する。

俳句における省略の機序は、補文の意図的な消去 (不言) として把握できるということ；および「不言の補文の補完」が俳句解釈の本質であるということ；が、本論文の中心的主張 (main claim) である。

1 はじめに

俳句の芸術的感興の源泉は、極限まで簡素化された語句の配置にあると言われる。簡素化の達成は語句の省略により行われる。省略された語句は情報 (メッセージ) の不言を結果するから、この不言の部分の補完は俳句の読み手に委ねられることとなる。読み手が適正に語句 (語り) の補完ができれば、俳句を深く味わうことができ、大きな芸術的感懐を堪能できる。一方また、補完作業は多分に恣意的であり、読み手の境遇や言語感性に依存するから、“俳句の鑑賞はむずかしい”という感想を惹起することも少なくない。

本論文では、俳句における語句の省略の補完を、恣意的な知的営為から脱却させ、文法論的に定式化する方法を提案する。言語学の分野では、文における“省略現象 (ellipsis)”は、語用論や意味論の立場から様々に研究されている。典型的な手法は、省略された語句あるいは文を、空所記号 (ϕ) あるいは痕跡記号 (t: trace) でマークしておき、痕跡 t が、文のどの部分に対応しているか分析 (考察) することで、省略の補完 (つまり補充解釈) を行う。対応関係は、通常“照応関係 (anaphora)”と呼ばれる。そして照応先にある語句は、もともと痕跡 (t) の位置にあった語句が移動してきたもの、という風に分析する。これが現代の言語学の手法の概略である。

省略されやすい語句は、補文あるいは補部 (compliment) と呼ばれる、構文要素であることが多い。補文とは、文における中心部である主辞 (head) と同位の座を占め、この補文 (補部) がないと、文の意味が完結しない。つまり必須の文構成成分である。これに対して、存在しなくても文の意味的成立 (完結) を妨げない、修飾要素は、付加語 (あるいは付加部, adjunct) と呼ばれ区別される。

本論文の以下の部分では、学校文法以後の、現代の文法理論における「補文構造」の概念を援用しつつ、俳句における様々な省略現象を分析した結果について、下記のような順序で報告する。

- 1) はじめに——研究の動機と目的、そして背景について述べる。
- 2) 俳句における省略——省略の実際を、俳句の解釈という観点から通覧する。ここでの省略の扱いは、俳句の文人から素人までに見られるごく一般的常識的な方法の通覧である。
- 3) 補文構造と補文標識——現代の文法論における、補文構造と補文標識の考え方の概略を、俳句（断片文）との関連で取り上げる。
- 4) 補文構造として捉えた省略——俳句における省略の機序を、補文あるいは補部の空所化（消去、不言）として捉える考え方を示し、この考え方の妥当性を検証する
- 5) おわりに——分析的考察により得られた知見を要約する。また併せて今後の研究課題についても言及する。

2 俳句における省略

語句の省略は、日本語文全般でごく普通に行われる言語運用行為である。ありふれた具体例をまず見てみよう。

- (1) 橋を渡ると花畑だ。
- (2) 夏はノーネクタイだ。
- (3) 刺身は鮪が一番だ。
- (4) 徹夜は応える。
- (5) 結構です！
- (6) 古池や蛙飛び込む水の音

上記の日本語文に対応する「省略のない標準的本語文（日本語文の正規形）」というようなものは存在しない。常識的に意味を補完すると下記のような解釈文が得られる。もちろんその他の解釈も多数存在する。解釈は文運用の環境、文脈、状況、前提、背景などに依存して大きく変動する。

- (1a) あなたが橋を渡ると、花畑に出るでしょう。
- (2a) 夏にはノーネクタイで出勤したい。
- (3a) 刺身の材料は鮪が一番美味である。
- (4a) 徹夜をすると老骨に応える。
- (5a) あなたが薦める商品を買うつもりは全くありません。
- (6a) 蛙が池に飛び込む小さな音で、古池の静けさを改めて認識した。
- (6b) 古池に蛙が次々と飛び込み、活気が溢れている。（ある西洋人の解釈）

（注意：いうまでもなく俳句の文を補完した正規な文などは存在せず、俳句はそのままの姿で詩文として完成しているのが、ここでは敢えて形式的な解釈文を省略補完の例として提示した）

要するにわれわれは日常生活において、省略のある日本語文を発行したり受理したりする。受理した際にはごく当然のこととして省略を補完して解釈する。また省略文を発行する際には脳内には省略部分のないメッセージ文が生起している。省略文の発行者と受理者の間で解釈が完全に一致することは稀有であるが、大きく食い違うことも稀である。その故に日常生活における発話行為や作文行為が円滑に進行する。

この補完作用のゆえに、日常会話の効率性が向上する。読み手や聞き手に要求される省略の質と量が

適正である場合には、文の理解のしやすさ、そして心地よさのような美的効果も増大する。

省略の美的効果は、俳句のような断片文において極大となる。省略表現が美意識を触発するための必要条件としては、下記が考えられる。

- 1) 強く読み手の心を惹きつけること
- 2) 多くの人に共感・共鳴されること

俳句を典型例とする簡潔な文では、多くが語られていない。述べていることの背景、前提、理由、帰結、時間と空間などが、不言である。その故に、個々の読み手が、自分の置かれている状態・境遇・時空に合わせた解釈（読み）をする自由度が増大する。この状況は単純素朴な水墨画が、濃厚な色彩をもつ油絵と同等あるいはそれ以上の説得力を持つ事情と似通っているのかもしれない。

次に、実際の俳句における省略の実相を俯瞰してみる。俳句は、文献[Kadokawa 2012-12], [Kadokawa 2013-1], [Kadokawa 2013-2], [Kokubungaku 2010-7], [Kurasaka 2012], [Oono 1984-4-20], [Mizuhara 2005-1-17], [Inahata 2010-6-1]などをコーパスとして利用しランダムに選択した。省略部の補完による解釈は、函数文法[Nitta 2011-10] [Nitta 2012-1]による表記により示した。Hはもとの俳句断片文、K1、K2などはHの意味を構成する基本要素としての核文、MはK1やK2を編集・変形するメタ文である。メタ文は一種の文構成函数と見なせる。

本章では、核文を拠点として意味レベルあるいは解釈レベルで、省略を扱うこととする。統語レベルあるいは表層文レベルでの省略の扱いは、事象で「補文構造」との関係付けて行うこととする。

(1) H = 古池や蛙飛びこむ水の音

K1 = 古池に蛙が飛びこむ

K2 = 水の音がする

M = K1が原因でK2が結果する

省略：だから何なのだ？に対する答えは与えていない。状況、感懐、印象、諦観、悟り、禪的境地、などは不言。切捨てられている。

(2) 柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺

K1 = 私は柿を食う

K2 = 法隆寺の鐘が鳴る

M = K1している時、K2という事態（事件）が起きた。

省略＝それがどうしたというのか。どういう気分がしたのか。どういう状況だったのか。などは不言である。（言わずとも知れるが）

明治28年10月、子規は奈良法隆寺を訪れ境内の茶店で柿を食べていた。すると鐘楼から鐘の音が聞こえてきた。平明そのものの句であるが、秋の境内の清澄な佇まい、柿の赤、鐘の音の乾いた荘厳を、省略（不言及）しているにもかかわらず、活写している。

(3) 昼湯より戻りて遊ぶ針供養

・高橋淡路女

- ・ K1 = 昼湯より戻る
- ・ K2 = 針仕事 (= 針供養) をしない
- ・ M = K1 そして (その後で) K2.

あるいは

K1 が原因・理由 (= 昼の風呂上りのけだるさ) で K2

- ・ 省略: K1 をする理由, K2 をした結果の句の作者の感懐, 全体の状況. [掃除洗濯料理子育て, そして針仕事などを毎日忙しくこなしていた] 昔の女の休日を描写している. のんびりした女の休日の様子が描写されている [大野林火 入門歳時記 角川 (1984)]

(4) びしょぬれの K が選ってきた月夜

- ・ 眞鍋呉夫 (「雪女」)
- ・ K1 = K さんはびしょぬれである
- ・ K2 = K さんが選ってきた
- ・ K3 = 月夜の晩
- ・ M () = K1 の状態で K2 した, 時は K3 である

省略: 状況と理由, 一体これはどうしたことなのか? 背景情報が与えられていないので読者は考え込んでしまう. その故に想像の翼が拡がる. (K は戦死者でその魂魄が, 三途の川からびしょぬれになって選ってきたのかもしれない)

(5) 約束の蛭になって来たといふ

- ・ 眞鍋呉夫 (「月魄」)
- ・ K1 = X さんは蛭に変身すると約束した
- ・ K2 = X さんが帰って来た
- ・ M = K1 してから K2 した.

・ 省略 (不言): X さん (主体, 主人公) が K1 した事情, 全体の状況. (生身では帰還できないので魂魄が蛭に変身して帰還したのかもしれない. 戦死者の御霊の帰還. cf. 上田秋成「菊花の契り」)

(6) 天の川露台にのこる椅子二つ

- ・ 竹久夢二
- ・ M () や Ki の記述は略.
- ・ 省略 (不言): 全体の状況. 天の川や残された二つの椅子を, なぜ作者がことさらに描写するのか, その理由は不言. 不言のゆえにこの句は美しい.
- ・ 答え: 最愛の女性笠井彦乃は 23 歳で死去 (結核). 夢二 35 歳のとき. 美しい銀河を椅子に座って二人でみたが, もう彼女はいない.
- ・ m (“椅子 2 つが残る”) = 二人揃って座ることはない. 死別の悲しみ.

(7) 死ぬときは箸を置くやうに草の花

- ・ 小川軽舟
- ・ 省略 (不言): このようなことを言う意味や真意.

- ・“箸を置くように”とはどういうことか？そしてそれは“草の花”とどう関わるのか？すべて不言、謎である。
- ・ひとつの推理：食事を終えて箸を置くように満足して、そしてさり気なく死ねたらよい。草の花を見よ。あれらのいつしか枯れてさり気なく世を去っていくではないか。自分は草の花のように無名の人として、そっと生涯を終えたいものだ。

(8) 寒鯉を見て雲水の去りゆけり

- ・森 澄雄
- ・K1 = 行脚僧が寒鯉を見る
- ・K2 = 行脚僧が去っていく
- ・M = K1そして(その後で) K2,

あるいは

K1が原因・理由(=行脚僧は何かを悟り) K2

- ・省略：K2の理由、この句の作者の感懐や全体の状況は一切語られていない。寒鯉の寂寞(まく)と雲水の孤影を髣髴させる句である [大野林火 入門歳時記 角川(1984)]

3 補文構造と補文標識

まず、橋本進吉の文法論 [Hashimoto 1934, 1944] に基づく伝統的学校文法論による、日本語文の文節構造を見てみよう。

(1) 私は 俳句を 作る。

という文は、下記のような文節構造を持つ単文とされる。

文 ← 文節1 + 文節2 + 文節3
 文節1 ← 私は
 文節2 ← 俳句を
 文節3 ← 作る

さらに橋本文法論では、文節の平面的な配置関係分析を深化させ、連用従属関係、連体従属関係、対等並列関係など、文節相互の意味的關係にも論及した。これらの関係は日本語文における「入れ子構造」としても定式化されている。

日本語の基本構成要素を、「文節」つまり「内容語」+「機能語」として捉えるやり方は、今なお健在であり、情報処理、特に自然言語処理の種々の応用プログラムで採用されている。「機能語」とは、助詞、格助詞、副助詞、助動詞、などの概念が複合・融合したものであり、英語文における構文的な位置づけ、助動詞の付与、前置詞(あるいは前置詞相当語句)の付与、などと比較的よく対応することが知られている(たとえば [Nitta 2012 a b] などにも論述がある)。

文の構成への研究的関心が強化されたのは、N. Chomsky の生成文法論に触発されて、英語文における

S → NP + VP

に対応する日本語の文生成規則を構築する努力(たとえば、奥津敬一郎の「生成日本文法論」[Okutsu

1974]) が開始されてからのように思われる。

本研究では生成文法論, 句構造論の枠組み, そして最近の GPSG (一般化句構造文法理論) や HPSG (主辞駆動型句構想文法理論) (たとえば [Gunji 1997]) の枠組みによる, 語句の移動や素性の伝播 (特に投射) などの概念手法は採用せず, 素朴な方法で日本文の構文構造 (syntax) を定式化する. このような単純素朴な形式化を採用する理由は, 日本語文の意味の抽出に力点を置き, 省略現象を直観的な語用論として扱うためである.

ところで「省略」を, 構文要素の欠落として分析する際には, 「補文構造 (compliment structure)」という概念が有効である.

変形生成文法論における強力な理論装置である, 補文構造, 補文標識 (註: 英語文では: that, wh 詞, to 不定詞, ing, 日本語文では: ~こと, ~という, の), 付加 (adjunct), 移動と痕跡, 下位範疇化の原理, などを, 今回は援用して, 俳句のような断片文における「省略」の分析を行う.

さて本論文では, [Okutsu 1974] のベースルールに準じて, 下記のような古典的書き換え規則 (production) の記法をゆるやかに使うことにする. 古典的書き換え規則は素朴な言語直観とよく馴染むからである.

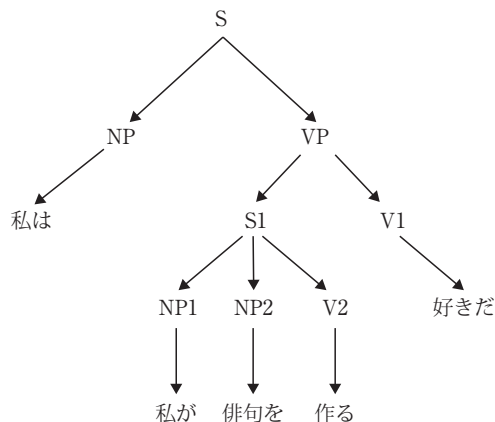
$$\begin{aligned} H &\rightarrow N + F + VP + NP \\ F &\rightarrow \text{“}\Phi\text{”}, \text{“}\text{や}\text{”}, \text{“}\text{の}\text{”}, \text{“}\text{かな}\text{”}, \dots \\ VP &\rightarrow N + V \\ VP &\rightarrow N + \text{“}\text{の}\text{”} + V \\ &\dots \end{aligned}$$

さらに近代の句構造文法理論, 特に変形生成理論を援用する.

S = 私は 俳句を 造るのが 好きだ.

というような日本語文の深層意味構造は, 下記のように分析される [Okutsu 1974] .

$$\begin{aligned} S &\leftarrow NP + VP \\ NP &\leftarrow \text{私は} \\ VP &\leftarrow S1 + V1 \\ V1 &\leftarrow \text{好きだ} \\ S1 &\leftarrow NP1 + NP2 + V2 \\ NP1 &\leftarrow \text{私が} \\ NP2 &\leftarrow \text{俳句を} \\ V2 &\leftarrow \text{作る} \end{aligned}$$



上記の木構造による表現を、平板な線状のブラケット記号で表現すると下記ようになる。
 S = 私は（私が 俳句を 作る）のが 好きだ

S = NP + VP

VP = S1 + Comp + V1

NP = 私は

S1 = [私が] 俳句を 作る

V1 = 好きだ

Comp = の

Comp は補文標識 (complementizer) であり、上記の文では「の」である。

S1 は補文 (complement) である。上記の文では、「埋め込み文」の形式をしており、私の好みの対象を表現している。

ここで注意すべきは、補文が、文 S の主要部（註：これを主辞という）である VP (= 好きだ) と同位の地位を占めている点である。

今日は（私が 本を 読む）[日] である

日曜日は（[私が] 本を 読む）[日] である

この部屋は（私が 本を 読む）[ところ] なのだ

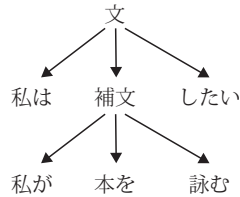
私は +（彼が 本を 読む）+ たい → 私は 彼に 本を 読ませ たい

上記の例文では丸カッコ“()”で囲まれた文が、補文となる。このような構造分析を勘案すると、“好きだ”、“である”“なのだ”“したい”という動詞句 (VP) を文法カテゴリの主部 (主辞) として立てておき、それと同位の補文 (complement) を配置して文全体を分析するというやり方が有利なように思われる。

このように「埋め込み文 (補文) 構造」を考えると、「たい」つまり「～したい」は、動詞「読む」に密着した欲求・願望の助動詞ではなく、主文の述語 (predicate) つまり動詞句となる。主文の述語

の項（述語が支配する文法要素）として補文をみる，というやり方には大きな利点がある．補文構造を書き下すと下記のようなになる．

- 文 ← 私は+補文+したい
- 補文 ← 私が+俳句を+詠む
- 補文標識 ← φ



主語が省略されている次の文を取り上げてみよう．

(3) 富士山は 噴火する かもしれない．

という文は

(4) かもしれない (富士山が+噴火する)



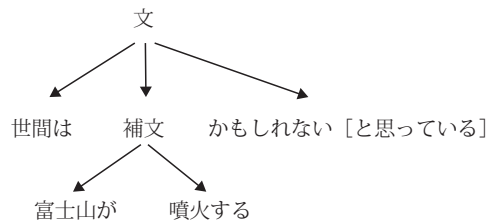
のように分析される．この分析は下記のような省略補完を素直に導出でき，かつ前記の(1)の文法分析と自然に整合する．つまり省略された主語を補完した文

(5) 世間は 富士山が 噴火する かもしれないと思っている．

が素直に導出できる．この導出された文の分析は下記のように書ける．

(6) 文 ← 私は／世間は／新聞は+ (補文) +かもしれない [と思っている].

補文 ← 富士山が+噴火する



これまで論述では，副助詞「は」と格助詞「が」の区別には意図的に無関心であったことを断ってお

く、どちらの助詞も主語を担ぐ機能語として扱った。

「は」と「が」以外の助詞, たとえば「に」, 「の」, 「で」, なども主語 (Subject) あるいは主格 (Agent) を担ぐ能力を持つことがある (たとえば [Tokunaga 2010-7] を参照せよ)。

補文 つまり主部に対する補部に位置する「埋め込み文」を, 引き出す日本語の語句としては, 「と」, 「の」, 「こと」が顕著である。これらの語句を「補文標識」と呼ぶことにする。

補文構造を導入したことは, 文の構文構造の分析に, 意味構造を少しだけ持ち込んだことになる。文の主語あるいは動作主が, 判断・予想・言及などの知的動作をしたことを, 構造的に分析したことになるからである。このような意味が関与する構造分析は, 文を単なる文節の集合とみる分析ではできないことであった。しかしながら,

日本語文 ← { 文節 [達] }

という単純明快な構文定義にも多くの利点がある。このことは後ほど言及する。

中括弧 { α } による記号式は, 要素 α からなる集合という意味である。 α は 1 個以上複数個存在してよい。Bag of α (α の入った袋) と俗称されることもある。

“複数個の文節” からなる文に, 様々な制約規則を課することにより, 実際の日本語文を定義 (あるいは規定・導出) するというやり方にも多くの利点があると本研究では考える。このやり方は後続の章で取り上げるが, 簡単に要点を述べておく。

日本語文 ← {文節 [達]} ただし 制約条件を満たす

が, その定式化であるが, 本研究では“文節”の代わりに“核文”を, “制約”の代わりに“メタ文”という概念を使う。核文は, 文節における内容語の部分, あるいは単文 (単純な命題文) である。メタ文は, 助詞の配置や文の配置 (つまり補文構造や付加文構造) を統括する規則をメタ記号により規定するものである。

補文は必ずしも“文”の形式をもつ必要はなく, 一般の句であってもよい。このことを強調するために“補部”と呼ばれることもある。

また何を補文と定義するかについても統一見解や標準は存在しない。元来, 英語文において, wh 詞や that に先導される文, (疑問文の中の埋め込み文や判断の内容を表す文), to 不定詞に後続する文, 使役動詞や感覚動詞の対象となる文などが, 補文として考察されてきた。日本語の文には, 英語の主部 (主辞) や動詞句 (VP) に, ピタリと対応する文構成要素が存在しないため, 英語と同様なやり方では補文は定義できない。また英語文であっても, 補文の定義には様々なバリエーションがある。

先ほどの例にもどるが,

S1 = 富士山が噴火する

は補文 (compliment) であるが,

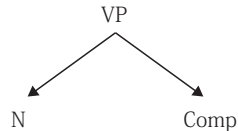
NP = 民主党は

を標識 (specifier) とし, 主辞 (head) は VP = 思う, のように見立てる解析も可能ではある。主語の存在を文の成立のための絶対条件とは見ず, 動詞句 (用言) こそが必須とみる考え方である。

最後に本論文で採用する補文の概念定義をまとめておく。

- 1) 文の意味的完成を実現するために必須の、文構成要素である。
- 2) 文の成立必須要素である主部（主辞）と同位の地位を占める。
- 3) 明示的であるにせよ黙示的であるにせよ、特定の標識（マーカー）に先導される文あるいは句である。このマーカーは補文標識（complementizer）と呼ばれる。

英文においては



という構造を持つことが多い。つまり主辞 VP に随伴し、補文標識に先導されることが多い。

X バー理論により、投射あるいは最大投射 (XP) という概念を使って補文を定義すると下記のようなになる。

- 1) 句は必ず 1 つの主要部 (head) を持つ。
- 2) 句は、主要部 X の性質を継承した X の投射 (projection) である。
- 3) 補部は主要部 X の同位要素 (sister)、付加部 (adjunct) は X バーの同位要素として出現する。

この定義により補文 (complement) と付加 (adjunct) の違いが、投射レベルの違いとして明示的に示される。付加は通常、時間・場所・状況・程度などを表す連用修飾句（たとえば副詞句）として出現することが多い。

4 補文構造を經由して捉えた省略

H1 = 狐火や髑髏に雨のたまる夜に	与謝蕪村
H2 = 公達（きんだち）に狐化けたり宵の春	与謝蕪村
H3 = 巫女（かんなぎ）に狐恋する夜寒かな	与謝蕪村

補文は

- S1 = 髑髏に雨のたまる
 S2 = 狐化けたり
 S3 = 狐恋する

付加部は

- Adjunct1 = 夜に
 Adjunct2 = 宵の春
 Adjunct3 = 夜寒

補文を經由あるいは介在させた省略は下記のように分析される。

Adjunct1 = 夜に, Adjunct2 = 宵の春, Adjunct3 = 夜寒で語られている, 夜, 宵, 春に, 一体何が

起こり、どのように感じたのか、すべて不言・省略されているが、読者は様々に想像の翼を拡げることができる。

函数文法による文の意味の考え方は、次式で表すことができる。

$H = M (K1, K2, K3)$

H: 表層文, たとえば俳句文

M: メタ文

Ki: 核文

M は、文の構成を担うパターンのようなものである。文意のマクロな記述の役割も担う。

通常の文法論と違って、核文 Ki の意味については議論を保留 (棚上げ) しておく。換言すれば、核文 Ki は、意味が自明の単純な命題文、つまり単純な主張を最も単純な形で表現した文である。少々短絡的な説明をすると、従来の文法論における「単語」の位置に、単純自明な命題文を置きこれを「核文」と称するのである。

核文の例を列举すれば下記のようなになる。

- ・人が動く
- ・川が流れる
- ・氷が解ける
- ・空が青い
- ・犬が吠える
- ・ビールを飲む
- ・疲労が回復する
- ・元気が出る
- ・秋刀魚を喰う
- ・柿を食う
- ・～を見る
- ・～を教える
- ・ . . .

核文はほぼ無数にある。核文においては複数の単語の組み合わせが許容される。単語よりもさらにバリエーションがあるので、核文のバリエーションは感覚的には無限である。

核文の個々の意味は分析せず、自明のものとして扱う。宣伝文に出現する核文は、これを収集発掘して核文 DB あるいは核文コーパスなどを構築するべきと思う。

本論文の目的は、宣伝文の意味、特に訴求力に力点を置く意味であるので、核文のもつ自明な命題的意味よりも少しマクロな“訴求”のメカニズムに焦点を絞った意味を扱う。

それではもう少し詳細に意味の取り扱いを見ていこう。核文と核文のつながり、あるいは核文の変形、といったようなマクロな構造の中に訴求力とかかわる意味があると考え、このマクロな構造を記述する文がメタ文 M () である。例を示す。

K1 = “一枚の葉が落ちる”

K2 = “秋を知る”

K3 = “世の中の衰退を感じる”

注意：文字列を表す引用符 “ ” は他の部分では略記している。次の記述では略した。

M (K1, K2, K3) = K1 が原因, 契機となり K2 さらに K3 に至る。

落葉を見て, 天下の秋, 世の衰退を感知した

メタ文 M により, 因果関係が導入され, 核文相互の関係や相乗効果が明示化される。しかしこのようなメタ文の作用は, 俳句を詠む人／読む人が自己の脳内作業として行うべきものである。このようにメタ文を通じて俳句の味わいや訴求力のメカニズムを捉えることも可能である。

5 おわりに

俳句 H は本質的に断片文である。断片文の最大特長は省略の極大使用である。しかし断片文であるがゆえに強いメッセージ伝達力（訴求力）を持つ。省略をしない文句は, その美質が低下し訴求力が弱化する。したがって優れた俳句にはならない。

省略の機序を現代文法論の武器である「補文」, 「補文標識」 「付加部」の考え方により説明する試論を述べた。

言語的訴求力の基準や評価尺度は, 今後の研究課題である。また俳句原案のどの部分をどのように省略をするのか, などを定式化・形式化することは, さらに先の課題である。

俳句文 H 全体の意味記述を, メタ文 M と核文 K により記述して, 補部および付加部と関連付けることが直近の研究課題である。

参考文献

- [Gengo 2012-4] 特集「文法の誕生, 文法の探求」, 月刊 言語, 大修館書店, Vol.31, No.4 (2002-4).
 [Gunji 1997] 郡司隆男, 自然言語の文法理論, 産業図書 (1997-12-15).
 [Hashimoto 1934] 橋本進吉, 国語法要説 (橋本進吉著作集, 第2冊) 岩波書店 (1934).
 [Hashimoto 1944] 橋本進吉, 文と文節と連文節 橋本進吉著作集, 第7冊) 岩波書店 (1944).
 [Inada1989] 稲田俊明, 補文の構造, 大修館書店 (1989-2-15).
 [Inahata 2010-6-1] 稲畑汀子 [編], 第三版 ホトトギス新歳時記, 三省堂 (2010-6-1).
 [Inoue-K 1976] 井上和子, 変形文法と日本語 上, 大修館書店, 東京 (1876).
 [Inoue-T 2002] 井上 徹, 英語における補文省略現象, 日本語用論学会 第5回大会 於関西外国語大学 (2002-12-7)
 初出「Missing Complement に関する一考察」.
 [Kadokawa 2012-12] 角川俳句——「省略」の極意, 角川学芸出版 (2012-12).
 [Kadokawa 2013-1] 角川俳句——新年の季語, 角川学芸出版 (2013-1).
 [Kadokawa 2013-2] 角川俳句——俳句は「瞬間」を詠む, 角川学芸出版 (2013-2).
 [Kokubungaku 2010-7] ぎょうせい国文学—解釈と鑑賞, 第73巻7号 (2010-7).
 [Kurasaka 2012] 倉坂鬼一郎, 怖い俳句, 幻冬舎新書260, 幻冬舎 (2012).
 [Kuwabara & Mastuyama 2001] 桑原和生, 松山哲也, 補文構造, 哲学モノグラフシリーズ4, 研究社 (2001-5-15).
 [Lee 1995] Lee 凧子, 日本語の補文構造——Lexicase 文法理論による分析, くろしお出版, 東京 (1995).
 [Matsushita 1977] 松下厚, 日本語文法の体系, 明治書院 (1077).
 [Mizuhara 2005-1-17] 水原秋櫻子 [編], 新装版 俳句小歳時記, 大泉書店 (2005-1-17).

- [Mogi 2000-10] 茂木俊伸 (としのぶ), とりたて詞の階層性について, 国語学会秋季大会於 安田女子大学要旨集 (2000-10-28 ~ 29) pp.54-61.
- [Nitta 2006] Y. Nitta, Building Carefully Tagged Bi-lingual Corpora to Cope with Linguistic Idiosyncrasy, Proc. LREC'06, 5th International Conference on Language Resources and Environment, Genova, Italy (2006) pp.840-854.
- [Nitta 2007-10] 文意の論理表現 (Representing Sentential Semantics in Logic), 経済集志, Vol.77, No.3 日本大学経済学部 (2007-10) pp.21-52.
- [Nitta 2008] Y. Nitta, Applying Machine Translation Technology to Language e-Learning, Proc.11thIASTEAD International Conference on Computers and Advanced Technology in Education (CATE2008) Greek, Crete Island (2008) pp.201-207.
- [Nitta 2008-3] 新田義彦, 言語産業を支える基礎技術の展望 (A View of Basic Technologies for Language Industry), 産業経営研究 第30号 (2008-3) pp.57-69.
- [Nitta 2011-1] 新田義彦, 不完全な機械翻訳の利用法と課題 (The Utility and Problem of Insufficient Machine Translation), 経済集志, Vol.80, No.4 日本大学経済学部 (2011-1) pp.1-54.
- [Nitta 2012-3-20] 新田義彦, 俳句の意味の形式的解釈の試み (An Essay on a Formal Interpretation of HAIKU), A-13-5 思考と言語セッション, 電子情報通信学会 2012 総合大会 (岡山大学) 講演論文集 (2012-3-20).
- [Nitta 2012-3-31] 新田義彦, 機械翻訳の原理と活用法——古典的機械翻訳再評価の試み, 明石書店 (2012-3-31).
- [Nitta 2012-7] Y. Nitta, Fragmental Syntax of Haiku and Its Effect in Elementary Language Education, 経済集志, Vol.82, No.2 日本大学経済学部 (2012-7) pp.21-32.
- [Nitta 2012-10] Y. Nitta, Aesthetic Sentence Generation by Functional Grammar, 経済集志, Vol.82, No.3 日本大学経済学部 (2012-10) pp.9-17.
- [Nitta 2012-3] 新田義彦, 日本型言語産業としての詩文作成支援システムの検討 (A Study on a Poetic Sentence Composition Support System as a Typical Product of Japanese Language Industry), 産業経営研究, 第34号, No.4, 日本大学経済学部 (2012-3) pp.1-19.
- [Nitta 2011] サイバースペースにおける自我と新産業 (On Self-consciousness and New Business in Cyber-space), 産業経営研究 No.33 (2011).
- [Nitta 2011-10] 新田義彦, 関数型文法による詩文の解釈 (An Interpretation of Poetic Sentences by Functional Grammar), 経済集志, Vol.81, No.3 日本大学経済学部 (2011-10) pp.1-13.
- [Nitta 2011-4] 新田義彦, 対訳アライメントの効用の検討 (A Study on the Utility of Bilingual Alignment), 経済集志, Vol.81, No.1, 日本大学経済学部 (2011-4) pp.1-38.
- [Nitta 2012-1] 新田義彦, 関数型文法による単文の変形 (Transformation of Simple Sentence using a Functional Grammar), 経済集志, Vol.81, No.4, 日本大学経済学部 (2012-1) pp.1-29.
- [Nitta 2012-3-1a] Y. Nitta, Foreign Language Education Using Classical Transfer-Base Machine Translation Technique, Recent Advances in Computer Science and Information Engineering Vol.3, Springer Verlag (2012-3-1) pp.443-450.
- [Nitta 2012-3-1b] Y. Nitta, Functional Treatment of Bilingual Alignment and Its Application to Semantic Processing, Advances in Intelligent and Soft Computing 144, Proceedings of the 2011 2nd International Congress on Computer Applications and Computational Science, 2011 Bali, Indonesia (2011-11-16), Springer Verlag (2012-3-1) pp.223-229.
- [Nitta 2012-5a] Y. Nitta, Formal Interpretation of HAIKU and Its Application to Communication Interface, Proceedings of ICSI 2012 (International Conference on Systems and Informatics), Yantai University, China, and IEEE (2012-5-19).
- [Nitta 2012-5b] Y. Nitta, Functional Treatment of HAIKU and Its Application to Language Education, Proceedings of the 8th International Conference on Fuzzy Systems and Knowledge Discovery (FSKD 2012) Chongqing, China (2012-5-29).
- [Nitta 2012-8] Y. Nitta, An Approach to Linguistic Aesthetics by Functional Grammar, Proceedings of 22nd Biennial Congress of The International Association of Empirical AESTHETICS, Taipei (IAEA2012), (2012-8-22 ~ 25).
- [Okutsu 1974] 奥津敬一郎, 生成日本文法論, 大修館書店 (1974).
- [Oono 1984-4-20] 大野林火 [監修], 俳句文学館 [編] ハンディ版入門歳時記, 角川書店 (1984-4-20).
- [Saraki & Nitta 2007] 佐良木 昌, 新田義彦, シテ形用言連接句の対訳データ構築と日英機械翻訳の訳質改善, 言語処理学会論文集, NL2007, C1-3 (2007).
- [Saraki & Nitta 2008] 佐良木 昌 & 新田義彦, 正規表現とテキスト・マイニング (増補2刷), 明石書店 (2008-4).
- [Satake 1986] 佐竹昭広, 古語雑談, 岩波新書 350, 岩波書店 (1986).

- [Shouji 1997-3] 庄司育子, 日本語の補文構造に関する一考察: 「Vに行く」構文について, 日本語・日本文化, 23 pp.39-53, OUKA (Osaka University Knowledge Archive) <http://hdl.handle.net/11094/9762> 大阪大学 (1997).
- [Tokunaga 2010-7] 徳永哲矢, 文の分析と主語——「主語」を問う視点, 国文学—解釈と鑑賞, 第73巻7号 (2010-7) pp.40-49.